

## CHAPTER 23

こっそりと城に戻る途中、ハリーはフェリックス フェリシスの幸運の効き目がだんだん切れていくのを感じた。

正面の扉こそまだ鍵がかかっていなかったものの、四階でピープズに出くわし、いつもの近道の一つに横っ飛びに飛び込んで、辛うじて見つからずにすんだ。

さらに時間が経って、「太った婦人」の肖像画の前で「透明マント」を脱いだときに、

「婦人」が最悪のムードだったのも、別に変だとは思わなかった。

「いま何時だと思ってるの？」

「ごめんなさい——大事な用で出かけなければならなかったの——」

「あのね、合言葉は真夜中に変ったの。だから、あなたは廊下で寝なければならないことになるわね？」

「まさか！」ハリーが言った。

「どうして真夜中にならなきゃいけないんだ？」

「そうになっているのよ」

「太った婦人」が言った。

「腹が立つなら校長先生に抗議しなさい。安全対策を厳しくしたのはあの方ですからね」

「そりゃいいや」

硬そうな床を見回しながら、ハリーが苦々しげに言った。

「まったくすごいや。ああ、ダンブルドアが学校にいるなら、抗議しにいくよ。だって、僕の用事はダンブルドアが——」

「いらっしゃいますぞ」

背後で声がした。

「ダンブルドア校長は、一時間前に学校に戻られました」

「ほとんど首無しニック」が、いつものように襲襟の上で首をグラグラさせながら、するとハリーに近づいてきた。

「校長が到着するのを見ていた、『血みどろ男爵』から聞きました」ニックが言った。

「男爵が言うには、校長は、もちろん少しお疲れのご様子ですが、お元気だそうです」

「どこにいるの？」ハリーは心が躍った。

「ああ、天文台の塔でうめいたり、鎧をガチ

## Chapter 23

### Horcruxes

Harry could feel the Felix Felicis wearing off as he crept back into the castle. The front door had remained unlocked for him, but on the third floor he met Peeves and only narrowly avoided detection by diving sideways through one of his shortcuts. By the time he got up to the portrait of the Fat Lady and pulled off his Invisibility Cloak, he was not surprised to find her in a most unhelpful mood.

“What sort of time do you call this?”

“I’m really sorry — I had to go out for something important —”

“Well, the password changed at midnight, so you’ll just have to sleep in the corridor, won’t you?”

“You’re joking!” said Harry. “Why did it have to change at midnight?”

“That’s the way it is,” said the Fat Lady. “If you’re angry, go and take it up with the headmaster, he’s the one who’s tightened security.”

“Fantastic,” said Harry bitterly, looking around at the hard floor. “Really brilliant. Yeah, I would go and take it up with Dumbledore if he was here, because he’s the one who wanted me to —”

“He is here,” said a voice behind Harry. “Professor Dumbledore returned to the school an hour ago.”

Nearly Headless Nick was gliding toward Harry, his head wobbling as usual upon his ruff.

“I had it from the Bloody Baron, who saw

やつかせたりしていますよ。男爵の趣味でして——」

「『血みどろ男爵』じゃなくて、ダンブルドア！」

「ああ——校長室です」ニックが言った。

「男爵の言い方から察しますに、お就寝になる前に何か用事がおありのようで——」

「うん、そうなんだ」

あの記憶を手に入れたことを、ダンブルドアに報告できると思うと、ハリーの胸は興奮で熱くなった。

くると向きを変え、「太った婦人」の声が追いかけてくるのを無視して、ハリーはまた駆け出した。

「戻ってらっしゃい！ ええ、わたしが嘘をついたの！ 起こされてイライラしたからよ！ 合言葉は変わってないわ。『サナダムシ』よ！」

しかし、ハリーはもう、廊下を疾走していた。

数分後には、ダンブルドアのガーゴイルに向かって「タフィーエクレア」と合言葉を言い、ガーゴイルは飛びのいて、ハリーを螺旋階段に通していた。

「お入り」ハリーのノックにダンブルドアが答えた。

疲れきった声だった。ハリーは扉を押して入った。

ダンブルドアの校長室はいつもどおりだったが、窓の外はまっ暗な空に星が散っていた。

「なんと、ハリー」ダンブルドアは驚いたように言った。

「こんなに夜更けにわしを訪ねてきてくれるとは、いったいどんなわけがあるのじゃ？」

「先生——手に入れました。スラグホーンの記憶を、手に入れました」

ハリーはガラスの小瓶を取り出して、ダンブルドアに見せた。

ダンブルドアは一瞬、不意を衝かれた様子だったが、やがてニッコリと顔をほころばせた。

「ハリー、すばらしい知らせじゃ！ ようやった！ きみならできると言うておった」

時間が遅いことなど、すっかり忘れてしまったように、ダンブルドアは急いで机の向こう

him arrive,” said Nick. “He appeared, according to the Baron, to be in good spirits, though a little tired, of course.”

“Where is he?” said Harry, his heart leaping.

“Oh, groaning and clanking up on the Astronomy Tower, it’s a favorite pastime of his —”

“Not the Bloody Baron — Dumbledore!”

“Oh — in his office,” said Nick. “I believe, from what the Baron said, that he had business to attend to before turning in —”

“Yeah, he has,” said Harry, excitement blazing in his chest at the prospect of telling Dumbledore he had secured the memory. He wheeled about and sprinted off again, ignoring the Fat Lady who was calling after him.

“Come back! All right, I lied! I was annoyed you woke me up! The password’s still ‘tapeworm’!”

But Harry was already hurtling back along the corridor and within minutes, he was saying “toffee éclairs” to Dumbledore’s gargoyle, which leapt aside, permitting Harry entrance onto the spiral staircase.

“Enter,” said Dumbledore when Harry knocked. He sounded exhausted.

Harry pushed open the door. There was Dumbledore’s office, looking the same as ever, but with black, star-strewn skies beyond the windows.

“Good gracious, Harry,” said Dumbledore in surprise. “To what do I owe this very late pleasure?”

“Sir — I’ve got it. I’ve got the memory from Slughorn.”

Harry pulled out the tiny glass bottle and

から出てきて、傷ついていないほうの手でスラグホーンの記憶の瓶を受け取り、「憂いの篩」がしまっている棚にツカツカと歩み寄った。

「いまこそ」

ダンブルドアは石の水盆を机に置き、瓶の中身をそこに注ぎながら言った。

「ついにいまこそ、見ることができる。ハリー、急ぐのじゃ……」

ハリーは素直に「憂いの篩」を覗き込み、床から足が離れるのを感じた……今回もまたハリーは、暗闇の中を落ちていき、何年も前のホラス スラグホーンの部屋に降り立った。いまよりずっと若いホラス スラグホーンがいる。艶のある豊かな麦藁色の髪に、赤毛交じりのブロンドの口髭のスラグホーンは、前の記憶と同じように、心地よさそうな肘掛椅子に腰掛け、ピロートのクッションに足を載せ、片手に小さなワイングラスをつかみ、もう一方の手で、砂糖漬けパイナップルの箱を探っていた。

十代の男の子が六人ほど、スラグホーンの周りに座り、そのまん中にトム リドルがいる。

その指に、マールヴオロの金と黒の指輪が光っていた。

ダンブルドアがハリーの横に姿を現したとき、リドルが聞いた。

「先生、メリソート先生が退職なさるといのは本当ですか？」

「トム、トム、たとえ知っていても、君には教えられないね」

スラグホーンは指をリドルに向けて、叱るように振ったが、同時にウィンクした。

「まったく、君って子は、どこで情報を仕入れてくるのか、知りたいものだ。教師の半数より情報通だね、君は」

リドルは微笑した。

ほかの少年たちは笑って、リドルを賞賛の眼差しで見た。

「知るべきではないことを知るとい、君の謎のような能力、大事な人間をうれしがらせる心遣い——ところで、パイナップルをありがとう。君の考えどおり、これはわたしの好物で——」何人かの男の子が、またクスクス

showed it to Dumbledore. For a moment or two, the headmaster looked stunned. Then his face split in a wide smile.

“Harry, this is spectacular news! Very well done indeed! I knew you could do it!”

All thought of the lateness of the hour apparently forgotten, he hurried around his desk, took the bottle with Slughorn’s memory in his uninjured hand, and strode over to the cabinet where he kept the Pensieve.

“And now,” said Dumbledore, placing the stone basin upon his desk and emptying the contents of the bottle into it. “Now, at last, we shall see. Harry, quickly …”

Harry bowed obediently over the Pensieve and felt his feet leave the office floor. ... Once again he fell through darkness and landed in Horace Slughorn’s office many years before.

There was the much younger Slughorn, with his thick, shiny, straw-colored hair and his gingery-blond mustache, sitting again in the comfortable winged armchair in his office, his feet resting upon a velvet pouffe, a small glass of wine in one hand, the other rummaging in a box of crystalized pineapple. And there were the half-dozen teenage boys sitting around Slughorn with Tom Riddle in the midst of them, Marvolo’s gold-and-black ring gleaming on his finger.

Dumbledore landed beside Harry just as Riddle asked, “Sir, is it true that Professor Merrythought is retiring?”

“Tom, Tom, if I knew I couldn’t tell you,” said Slughorn, wagging his finger reprovingly at Riddle, though winking at the same time. “I must say, I’d like to know where you get your information, boy, more knowledgeable than half the staff, you are.”

笑った。

「――君は、これから二十年のうちに魔法大臣になれると、わたしは確信しているよ。引き続きパイナップルを送ってくれたら十五年だ。魔法省にはすはらしいコネがある」

ほかの男の子はまた笑ったが、トム・リドルは微笑んだだけだった。

リドルがそのグループで最年長ではないのに、全員がリドルをリーダーとみなしているらしいことに、ハリーは気がついた。

「先生、僕に政治が向いているかどうかわかりません」笑い声が収まったところで、リドルが言った。

「一つには、僕の生い立ちがふさわしいものではありません」

リドルの周りにいた男の子が二人、顔を見合わせてニヤリと笑った。

仲間だけに通じる冗談を楽しんでいるのだと、ハリーにはわかった。

自分たちの大將が、有名な先祖の子孫だと知っているか、またはそうだろうと考えているに違いない。

「バカな」スラグホーンがきびきびと言った。

「君ほどの能力だ。由緒正しい魔法使いの家系であることは火を見るよりも明らかだ。いや、トム、君は出世する。生徒に関して、私が間違っただめしはない」

スラグホーンの背後で、机の上の小さな金色の置き時計が、十一時を打った。

スラグホーンが振り返った。

「なんとまあ、もうそんな時間か？ みんな、もう戻ったほうがいい。そうしないと、みんな困ったことになるからね。レストレンジ、明日までにレポートを書いてこないと、罰則だぞ。エイブリー、君もだ」

男の子たちがぞろぞろ出て行く間、スラグホーンは肘掛椅子から重い腰を上げ、空になったグラスを机のほうに持っていった。

背後の気配でスラグホーンが振り返ると、リドルがまだそこに立っていた。

「トム、早くせんか。時間外にベッドを抜け出しているところを捕まりたくはないだろう。君は監督生なのだし……」

「先生、お伺いしたいことがあるんです」

Riddle smiled; the other boys laughed and cast him admiring looks.

“What with your uncanny ability to know things you shouldn’t, and your careful flattery of the people who matter — thank you for the pineapple, by the way, you’re quite right, it is my favorite —”

Several of the boys tittered again.

“— I confidently expect you to rise to Minister of Magic within twenty years. Fifteen, if you keep sending me pineapple, I have *excellent* contacts at the Ministry.”

Tom Riddle merely smiled as the others laughed again. Harry noticed that he was by no means the eldest of the group of boys, but that they all seemed to look to him as their leader.

“I don’t know that politics would suit me, sir,” he said when the laughter had died away. “I don’t have the right kind of background, for one thing.”

A couple of the boys around him smirked at each other. Harry was sure they were enjoying a private joke, undoubtedly about what they knew, or suspected, regarding their gang leader’s famous ancestor.

“Nonsense,” said Slughorn briskly, “couldn’t be plainer you come from decent Wizarding stock, abilities like yours. No, you’ll go far, Tom, I’ve never been wrong about a student yet.”

The small golden clock standing upon Slughorn’s desk chimed eleven o’clock behind him and he looked around.

“Good gracious, is it that time already? You’d better get going, boys, or we’ll all be in trouble. Lestrangle, I want your essay by tomorrow or it’s detention. Same goes for you,

「それじゃ、遠慮なく聞きなさい、トム、遠慮なく」

「先生、ご存知でしょうか……ホークラックスのことですか？」

スラグホーンはリドルをじっと見つめた。ずんぐりした指が、ワイングラスの足を無意識にな撫でている。

「『闇の魔術に対する防衛術』の課題かね？」

学校の課題ではないことを、スラグホーンは百も承知だと、ハリーは思った。

「いいえ、先生、そういうことでは」リドルが答えた。

「本を読んでいて見つけた言葉ですが、完全にはわかりませんでした」

「ふむ……まあ……トム、ホグワーツでホークラックスの詳細を書いた本を見つけるのは骨だろう。闇も闇、まっ暗闇の術だ」スラグホーンが言った。

「でも、先生はすべてご存知なのでしょう？つまり、先生ほどの魔法使いなら——すみません。つまり、先生が教えてくださらないなら、当然——誰かが教えてくれるとしたなら、先生しかないと思ったのです——ですから、とにかく何ってみようと——」

うまい、とハリーは思った。

遠慮がちに、何気ない調子で慎重におだて上げる。

どれ一つとしてやりすぎてはいない。

気が進まない相手をうまく乗せて情報を聞き出すことにかけては、ハリー自身が嫌というほど経験していたので、名人芸だと認めることができた。

リドルはその情報がほしくてたまらないのだとわかった。

おそらく、このときのために何週間も準備していたのだろう。

「さてと」

スラグホーンはリドルの顔を見ずに、砂糖漬けパイナップルの箱の上のリボンをいじりながら言った。

「まあ、勿論、ざっとしたことを君に話しても別にかまわないだろう。その言葉を理解するためだけになら。ホークラックスとは、人がその魂の一部を隠すために用いられる物を

Avery.”

One by one, the boys filed out of the room. Slughorn heaved himself out of his armchair and carried his empty glass over to his desk. A movement behind him made him look around; Riddle was still standing there.

“Look sharp, Tom, you don’t want to be caught out of bed out of hours, and you a prefect …”

“Sir, I wanted to ask you something.”

“Ask away, then, m’boy, ask away. …”

“Sir, I wondered what you know about … about Horcruxes?”

Slughorn stared at him, his thick fingers absentmindedly caressing the stem of his wine glass.

“Project for Defense Against the Dark Arts, is it?”

But Harry could tell that Slughorn knew perfectly well that this was not schoolwork.

“Not exactly, sir,” said Riddle. “I came across the term while reading and I didn’t fully understand it.”

“No … well … you’d be hard-pushed to find a book at Hogwarts that’ll give you details on Horcruxes, Tom, that’s very Dark stuff, very Dark indeed,” said Slughorn.

“But you obviously know all about them, sir? I mean, a wizard like you — sorry, I mean, if you can’t tell me, obviously — I just knew if anyone could tell me, you could — so I just thought I’d ask —”

It was very well done, thought Harry, the hesitancy, the casual tone, the careful flattery, none of it overdone. He, Harry, had had too much experience of trying to wheedle information out of reluctant people not to

指す言葉で、分霊箱とも呼ばれる」

「でも、先生、どうやってやるのか、僕にはよくわかりません」リドルが言った。

慎重に声を抑えてはいたが、ハリーはリドルが興奮しているのを感じることができた。

「それはだね、魂を分断するわけだ」スラグホーンが言った。

「そして、その部分を体の外にある物に隠す。すると、体が攻撃されたり破滅したりしても、死ぬことはない。なぜなら、魂の一部は滅びずに地上に残るからだ。しかし、勿論、そういう形での存在は……」

スラグホーンは激しく顔をしかめた。

ハリー自身も、思わずほぼ二年前に聞いた言葉を思い出していた。

「私は肉体から引き裂かれ、靈魂にも満たない、ゴーストの端くれにも劣るものになった……しかし、私はまだ生きていた」

「……トム、それを望む者は滅多におるまい。滅多に。死のほう望ましいだろう」

しかし、リドルはいまや欲望をむき出しにしていた。

渴望を隠しきれず、貪欲な表情になっていた。

「どうやって魂を分断するのですか？」

「それは」

スラグホーンが当惑しながら言った。

「魂は完全な一体であるはずだということを理解しなければならない。分断するのは暴力行為であり、自然に逆らう」

「でも、どうやるのですか？」

「邪悪な行為——悪の極みの行為による。殺人を犯すことによってだ。殺人は魂を引き裂く。分霊箱を作ろうと意図する魔法使いは、破壊を自らのために利用する。引き裂かれた部分を物に閉じ込める——」

「閉じ込める？ でも、どうやって——？」

「呪文がある。聞かないでくれ。わたしは知らない！」

スラグホーンは年老いた象がうるさい蚊を追いかけるように頭を振った。

「わたしがやったことがあるように見えるかね——わたしが殺人者に見えるかね？」

「いいえ、先生、もちろん、違います」リドルが急いで言った。

recognize a master at work. He could tell that Riddle wanted the information very, very much; perhaps had been working toward this moment for weeks.

“Well,” said Slughorn, not looking at Riddle, but fiddling with the ribbon on top of his box of crystalized pineapple, “well, it can’t hurt to give you an overview, of course. Just so that you understand the term. A Horcrux is the word used for an object in which a person has concealed part of their soul.”

“I don’t quite understand how that works, though, sir,” said Riddle.

His voice was carefully controlled, but Harry could sense his excitement.

“Well, you split your soul, you see,” said Slughorn, “and hide part of it in an object outside the body. Then, even if one’s body is attacked or destroyed, one cannot die, for part of the soul remains earthbound and undamaged. But of course, existence in such a form ...”

Slughorn’s face crumpled and Harry found himself remembering words he had heard nearly two years before: “*I was ripped from my body, I was less than spirit, less than the meanest ghost ... but still, I was alive.*”

“... few would want it, Tom, very few. Death would be preferable.”

But Riddle’s hunger was now apparent; his expression was greedy, he could no longer hide his longing.

“How do you split your soul?”

“Well,” said Slughorn uncomfortably, “you must understand that the soul is supposed to remain intact and whole. Splitting it is an act of violation, it is against nature.”

「すみません……お気を悪くさせるつもりは……」

「いや、いや、気を悪くしてはいない」スラグホーンがぶっきらぼうに言った。

「こういうことにちょっと興味を持つのは自然なことだ……ある程度の才能を持った魔法使いは、常にその類の魔法に惹かれてきた……」

「そうですね、先生」リドルが言った。

「でも、僕がわからないのは——ほんの好奇心ですが——あの、一個だけの分霊箱で役に立つのでしょうか？ 魂は一回しか分断できないのでしょうか？ もっとたくさん分断するほうがより確かで、より強力になれるのではないのでしょうか？ つまり、たとえば、七という数は、いちばん強い魔法数字ではないですか？ 七個の場合は——」

「とんでもない、トム！」スラグホーンが甲高く叫んだ。

「七個！ 一人を殺すと考えるだけでも十分に悪いことじゃないかね？ それに、いずれにしても……魂を二つに分断するだけでも十分に悪い……七つに引き裂くなど……」

スラグホーンは、こんどは困り果てた顔で、それまで一度もはっきりとリドルを見たことがないかのような目で、じっとリドルを見つめていた。

そもそもこんな話を始めたこと自体を後悔しているのだと、ハリーには察しがついた。

「勿論」スラグホーンが呟いた。

「すべて仮定の上での話だ。我々が話していることは。そうだね？ すべて学問的な……？」

「ええ、もちろんです。先生」リドルがすぐに答えた。

「しかし、いずれにしても、トム……黙っていてくれ。わたしが話したことは——つまり、我々が話したことは、という意味だが。我々が分霊箱のことを気軽に話したことが知れると、世間体が悪い。ホグワーツでは、つまり、この話題は禁じられている……ダンブルドアは特にこのことについて厳しい……」

「一言も言いません。先生」

そう言うと、リドルは出ていった。しかしその前に、ハリーはちらりとその顔を

“But how do you do it?”

“By an act of evil — the supreme act of evil. By committing murder. Killing rips the soul apart. The wizard intent upon creating a Horcrux would use the damage to his advantage: He would encase the torn portion —”

“Encase? But how — ?”

“There is a spell, do not ask me, I don’t know!” said Slughorn, shaking his head like an old elephant bothered by mosquitoes. “Do I look as though I have tried it — do I look like a killer?”

“No, sir, of course not,” said Riddle quickly. “I’m sorry … I didn’t mean to offend …”

“Not at all, not at all, not offended,” said Slughorn gruffly. “It’s natural to feel some curiosity about these things. … Wizards of a certain caliber have always been drawn to that aspect of magic. …”

“Yes, sir,” said Riddle. “What I don’t understand, though — just out of curiosity — I mean, would one Horcrux be much use? Can you only split your soul once? Wouldn’t it be better, make you stronger, to have your soul in more pieces, I mean, for instance, isn’t seven the most powerfully magical number, wouldn’t seven — ?”

“Merlin’s beard, Tom!” yelled Slughorn. “Seven! Isn’t it bad enough to think of killing one person? And in any case … bad enough to divide the soul … but to rip it into seven pieces …”

Slughorn looked deeply troubled now: He was gazing at Riddle as though he had never seen him plainly before, and Harry could tell that he was regretting entering into the

見た。

自分が魔法使いだと初めて知ったときに見せたと同じ、あのむき出しの幸福感に満ちた顔だった。

幸福感が端正な面立ちを引き立たせるのではなく、なぜか非人間的な顔にしていた……。

「ハリー、ありがとう」ダンブルドアが静かに言った。「戻ろうぞ……」

ハリーが校長室の床に着地したとき、ダンブルドアはすでに机の向こう側に座っていた。ハリーも腰掛けて、ダンブルドアの言葉を待った。

「わしはずいぶん長い間、この証拠を求めておった」

しばらくしてダンブルドアが話しはじめた。

「わしが考えていた理論を裏づける証拠じゃ。これで、わしの理論が正しいということと同時に、道程がまだ遠いことがわかる……」

ハリーは突然、壁の歴代校長の肖像画がすべて目を覚まして、二人の会話に聞き入っていることに気がついた。

でっぷり太った赤鼻の魔法使いは、古いラッパ形補聴器まで取り出していた。

「さて、ハリー」ダンブルドアが言った。

「きみは、いましがた我々が耳にしたことの重大さに気づいておることじゃろう。いまのきみとほんの数カ月と違わぬ同年で、トム・リドルは、自らを不滅にする方策を探し出すのに全力を傾けておった」

「先生はそれが成功したとお考えですか？」ハリーが開いた。

「あいつは分霊箱を作ったのですか？ 僕を襲ったときに死ななかったのは、そのせいなのですか？ どこかに分霊箱を一つ隠していたのですか？ 魂の一部は安全だったのですか？」

「一部……もしくはそれ以上」ダンブルドアが言った。

「ヴォルデモートの言葉を聞いたじゃろうが、ホラスから特に聞き出したがっていたのは、複数の分霊箱を作った魔法使いはどうなるかに関する意見じゃった。是が非でも死を回避せんと、何度も殺人を犯すことをも辞さない魔法使いが、繰り返し引き裂いた魂を、

conversation at all.

“Of course,” he muttered, “this is all hypothetical, what we’re discussing, isn’t it? All academic …”

“Yes, sir, of course,” said Riddle quickly.

“But all the same, Tom … keep it quiet, what I’ve told — that’s to say, what we’ve discussed. People wouldn’t like to think we’ve been chatting about Horcruxes. It’s a banned subject at Hogwarts, you know. … Dumbledore’s particularly fierce about it. …”

“I won’t say a word, sir,” said Riddle, and he left, but not before Harry had glimpsed his face, which was full of that same wild happiness it had worn when he had first found out that he was a wizard, the sort of happiness that did not enhance his handsome features, but made them, somehow, less human. …

“Thank you, Harry,” said Dumbledore quietly. “Let us go. …”

When Harry landed back on the office floor Dumbledore was already sitting down behind his desk. Harry sat too and waited for Dumbledore to speak.

“I have been hoping for this piece of evidence for a very long time,” said Dumbledore at last. “It confirms the theory on which I have been working, it tells me that I am right, and also how very far there is still to go. …”

Harry suddenly noticed that every single one of the old headmasters and headmistresses in the portraits around the walls was awake and listening in on their conversation. A corpulent, red-nosed wizard had actually taken out an ear trumpet.

“Well, Harry,” said Dumbledore, “I am sure



数多くの分霊箱に別々に収めて隠した場合、その魔法使いがどうなるかについての意見じゃ。どの本からそのような情報は得られなかったじゃろう。わしの知るかぎりーヴォルデモートの知るかぎりでもあろうと確信しておるがー魂を二つに引き裂く以上のことをした魔法使いは、いまだかつておらぬ」ダンブルドアは一瞬言葉を切り、考えを整理していたが、やがて口を開いた。

「四年前、わしは、ヴォルデモートが魂を分断した確かな証拠と考えられる物を受け取った」

「どこですか？」ハリーが聞いた。

「どうやってですか？」

「きみがわしに手渡したのじゃ、ハリー」ダンブルドアが言った。

「日記、リドルの日記じゃ。『秘密の部屋』を、いかにして再び開くかを指示した日記じゃ」

「よくわかりません、先生」ハリーが言った。

「されば、日記から現れたリドルをわしは見えておらぬが、きみが説明してくれた現象は、わしが一度も目撃したことのないものじゃった。単なる記憶が行動を起こし、自分で考えるとは？ 単なる記憶が、手中にした少女の命を搾り取るであろうか？ ありえぬ。あの本の中には、何かもっと邪悪なものが棲みついておったのじゃ……魂の欠けらが。わしはほぼ確信した。日記は分霊箱じゃった。しかし、これで一つの答えを得たものの、より多くの疑問が起こった。わしがもっとも関心を持ち、また驚愕したのは、あの日記が護りの道具としてだけではなく、武器として意図されていたことじゃった」

「まだよくわかりません、先生」ハリーが言った。

「左様。あれは分霊箱として然るべき機能を果たしたー換言すれば、その中に隠された魂の欠けらは安全に保管され、間違いなく、その所有者が死ぬことを回避する役目を果たした。しかし、リドルが実は、あの日記が読まれることを望んでいたのは、疑いの余地がない。スリザリンの怪物が再び解き放たれるよう、自分の魂の欠けらが、誰かの中に棲み

you understood the significance of what we just heard. At the same age as you are now, give or take a few months, Tom Riddle was doing all he could to find out how to make himself immortal.”

“You think he succeeded then, sir?” asked Harry. “He made a Horcrux? And that’s why he didn’t die when he attacked me? He had a Horcrux hidden somewhere? A bit of his soul was safe?”

“A bit ... or more,” said Dumbledore. “You heard Voldemort: What he particularly wanted from Horace was an opinion on what would happen to the wizard who created more than one Horcrux, what would happen to the wizard so determined to evade death that he would be prepared to murder many times, rip his soul repeatedly, so as to store it in many, separately concealed Horcruxes. No book would have given him that information. As far as I know — as far, I am sure, as Voldemort knew — no wizard had ever done more than tear his soul in two.”

Dumbledore paused for a moment, marshaling his thoughts, and then said, “Four years ago, I received what I considered certain proof that Voldemort had split his soul.”

“Where?” asked Harry “How?”

“You handed it to me, Harry,” said Dumbledore. “The diary, Riddle’s diary, the one giving instructions on how to reopen the Chamber of Secrets.”

“I don’t understand, sir,” said Harry.

“Well, although I did not see the Riddle who came out of the diary, what you described to me was a phenomenon I had never witnessed. A mere memory starting to act and think for itself? A mere memory, sapping the

つくか取り憑くかすることを望んでおったのじゃ」

「ええ、せっかく苦労して作ったものを、ムダにはしたくなかったのでしょう」ハリーが言った。

「自分がスリザリンの継承者だということを、みんなに知ってほしかったんだ。あの時代にはそういう評価が得られなかったから」「まさにそのとおりじゃ」ダンブルドアが頷いた。

「しかし、ハリー、気づかぬか？ 日記を未来のホグワーツの生徒の手に渡したり、こっそり忍び込ませたりすることを、ヴォルデモートが意図していたとすれば、その中に隠した大切な自分の魂の欠けらに関して、あまりに投げ遣りではないか。分霊箱の所以は、スラグホーン先生の説明にもあったように、自分の一部を安全に隠しておくことであり、誰かの行く手に投げ出して、破壊されてしまう危険を冒したりせぬものじゃ——事実そうやってしもうた。あの魂の欠けらは失われた。きみがそうしたのじゃ」

「ヴォルデモートがあのだ分霊箱を軽率に考えていたということが、わしにとってはもっとも不気味なのじゃ。つまり、それは、ヴォルデモートがすでに、さらに複数の分霊箱を作った——または作ろうとしていた——ということを示唆しておる。つまり最初の分霊箱の喪失が、それほど致命的にならぬようにしたのじゃ。

信じたくはないが、それ以外には説明がつかぬ」

「それから二年後、きみは、ヴォルデモートが肉体を取り戻した夜のことを、わしに語ってくれた。死喰い人たちに、ヴォルデモートは、まことに示唆に富む、驚くべきことを言うておる。『誰よりも深く不死の道へと入り込んでいたこの私が』とな。ヴォルデモートがそう言うたと、きみが話してくれた。『誰よりも深く』と。そして、死喰い人には理解できなんじゃったろうが、わしはその意味がわかった。ヴォルデモートは分霊箱のことを言うておったのじゃ。複数の分霊箱じゃよ、ハリー。ほかの魔法使いにそのような前例はないじゃろう。しかし、辻褄が合う。ヴォル

life out of the girl into whose hands it had fallen? No, something much more sinister had lived inside that book. ... a fragment of soul, I was almost sure of it. The diary had been a Horcrux. But this raised as many questions as it answered.

“What intrigued and alarmed me most was that that diary had been intended as a weapon as much as a safeguard.”

“I still don’t understand,” said Harry.

“Well, it worked as a Horcrux is supposed to work — in other words, the fragment of soul concealed inside it was kept safe and had undoubtedly played its part in preventing the death of its owner. But there could be no doubt that Riddle really wanted that diary read, wanted the piece of his soul to inhabit or possess somebody else, so that Slytherin’s monster would be unleashed again.”

“Well, he didn’t want his hard work to be wasted,” said Harry. “He wanted people to know he was Slytherin’s heir, because he couldn’t take credit at the time.”

“Quite correct,” said Dumbledore, nodding. “But don’t you see, Harry, that if he intended the diary to be passed to, or planted on, some future Hogwarts student, he was being remarkably blasé about that precious fragment of his soul concealed within it. The point of a Horcrux is, as Professor Slughorn explained, to keep part of the self hidden and safe, not to fling it into somebody else’s path and run the risk that they might destroy it — as indeed happened: That particular fragment of soul is no more; you saw to that.

“The careless way in which Voldemort regarded this Horcrux seemed most ominous to me. It suggested that he must have made — or

デモート卿は、年月が軽つにつれ、ますます人間離れした姿になっていった。わしが思うに、そうした変身の道を説明できるのは、唯一、あの者がその魂を、我々が通常の悪と呼ぶものを超えた領域にまで切り刻んでいたということじゃ……」

「それじゃ、あいつは、ほかの人間を殺すことで、自分が殺されるのを不可能にしたのですか？」ハリーが聞いた。

「それほど不滅になりたかったのなら、どうして自分で『賢者の石』を創るか、盗むかしなかったのでしょうか？」

「いや、そうしようとしたことはわかっておる。五年前のことじゃ」ダンブルドアが言った。

「しかし、ヴォルデモート卿にとって、『賢者の石』は分霊箱ほど魅力がなかったのではないかと、わしは考えておる。それにはいくつか理由がある」

「『命の霊薬』はたしかに生命を延長するものではあるが、不滅の命を保つには、定期的に、永遠に飲み続けなければならない。さすれば、ヴォルデモートは、その霊薬に全面的に依存することになり、霊薬が切れたり不純なものになったりするか、または『石』が盗まれた場合は、ヴォルデモートはほかの者同様、死ぬことになるであろう。ヴォルデモートは、憶えておろうが、自分ひとりで事を為したが。依存するということは、たとえそれが霊薬への依存であろうとも、我慢ならなかったのであろうと思う。もちろん、きみを襲った後に、あのように恐ろしい半生命の状態で貶められ、そこから抜け出すためであれば霊薬を飲もうと思ったのであろう。しかし、それは肉体を取り戻すためにのみじゃ。それ以後は、引き続き分霊箱を信賴しようとしていたと、わしは確信しておる。それ以外には何も必要ではなかった。ただ人間としての形を取り戻すことさえできれば。あの者はすでに不滅だったのじゃから……もしくは、ほかの誰も到達できないほどに、不滅に近かったのじゃから」

「しかし、ハリーよ、きみが首尾よく手に入れてくれた、この肝心な記憶という情報が武器になり、我々はいまこそ、ヴォルデモート

been planning to make — more Horcruxes, so that the loss of his first would not be so detrimental. I did not wish to believe it, but nothing else seemed to make sense.

“Then you told me, two years later, that on the night that Voldemort returned to his body, he made a most illuminating and alarming statement to his Death Eaters. ‘*I, who have gone further than anybody along the path that leads to immortality.*’ That was what you told me he said. ‘*Further than anybody,*’ And I thought I knew what that meant, though the Death Eaters did not. He was referring to his Horcruxes, Horcruxes in the plural, Harry, which I do not believe any other wizard has ever had. Yet it fitted: Lord Voldemort has seemed to grow less human with the passing years, and the transformation he has undergone seemed to me to be only explicable if his soul was mutilated beyond the realms of what we might call ‘usual evil’ …”

“So he’s made himself impossible to kill by murdering other people?” said Harry. “Why couldn’t he make a Sorcerer’s Stone, or steal one, if he was so interested in immortality?”

“Well, we know that he tried to do just that, five years ago,” said Dumbledore. “But there are several reasons why, I think, a Sorcerer’s Stone would appeal less than Horcruxes to Lord Voldemort.

“While the Elixir of Life does indeed extend life, it must be drunk regularly, for all eternity, if the drinker is to maintain their immortality. Therefore, Voldemort would be entirely dependent on the Elixir, and if it ran out, or was contaminated, or if the Stone was stolen, he would die just like any other man. Voldemort likes to operate alone, remember. I

卿を破滅させるための秘密に、これまでの誰よりも近づいておる。ハリー、あの者の言葉を聞いたじゃろう。『もっとたくさん分断するほうがより確かで、より強力になれるのではないのでしょうか……七という数は、いちばん強い魔法数字ではないですか？』七という数は、いちばん強い魔法数字ではないですか。左様。七分断された魂という考えが、ヴォルデモート卿を強く惹きつけたであろうと思うのじゃ」

「七個の分霊箱を作ったのですか？」

ハリーは恐ろしさに身震いし、壁の肖像画の何枚かも、同じように衝撃と怒りの声を上げた。

「でも、その七個は、世界中のどこにだってありうる——隠して——埋めたり、見えなくしたり——」

「問題の大きさに気づいてくれたのはうれしい」ダンブルドアが冷静に言った。

「しかし、まず、ハリー、七個の分霊箱ではない。

六個じゃ。七個目の魂は、どのように損傷されていようとも、蘇った身体の中に宿っておる。長年の逃亡中、幽霊のような存在で生きていた部分じゃ。それなしでは、あの者に自己というものはまったくない。その七番目の魂こそ、ヴォルデモートを殺そうとする者が最後に攻撃しなければならない部分じゃ——ヴォルデモートの身体の中に棲む魂の欠けらじゃ」

「でも、それじゃ、六個の分霊箱は」ハリーは絶望気味に言った。

「いったいどこを探せばよいのですか？」

「忘れておるようじゃの……きみはすでにそのうちの一個を破壊した。そしてわしももう一個を破壊した」

「先生が？」ハリーは急き込んだ。

「いかにも」

ダンブルドアはそう言うと、黒く焼け焦げたような手を挙げた。

「指輪じゃよ、ハリー。マールヴォロの指輪じゃ。それにも恐ろしい呪いがかけられておった。わしの並外れた術と——謙譲という美德に欠ける言い方を許しておくれ——さらに、著しく傷ついてホグワーツに戻ったとき

believe that he would have found the thought of being dependent, even on the Elixir, intolerable. Of course he was prepared to drink it if it would take him out of the horrible part-life to which he was condemned after attacking you, but only to regain a body. Thereafter, I am convinced, he intended to continue to rely on his Horcruxes: He would need nothing more, if only he could regain a human form. He was already immortal, you see ... or as close to immortal as any man can be.

“But now, Harry, armed with this information, the crucial memory you have succeeded in procuring for us, we are closer to the secret of finishing Lord Voldemort than anyone has ever been before. You heard him, Harry: ‘Wouldn’t it be better, make you stronger, to have your soul in more pieces ... isn’t seven the most powerfully magical number ...’ *Isn’t seven the most powerfully magical number.* Yes, I think the idea of a seven-part soul would greatly appeal to Lord Voldemort.”

“He made *seven* Horcruxes?” said Harry, horror-struck, while several of the portraits on the walls made similar noises of shock and outrage. “But they could be anywhere in the world — hidden — buried or invisible —”

“I am glad to see you appreciate the magnitude of the problem,” said Dumbledore calmly “But firstly, no, Harry, not seven Horcruxes: six. The seventh part of his soul, however maimed, resides inside his regenerated body. That was the part of him that lived a spectral existence for so many years during his exile; without that, he has no self at all. That seventh piece of soul will be the last that anybody wishing to kill Voldemort must

のスネイプ先生のすばやい処置がなければ、わしは生きてこの話をする事ができなかったことじゃろう。しかし、片手が萎えようとも、ヴォルデモートの七分の一の魂と引き換えなら、理不尽ではないじゃろう。指輪はもはや分霊箱ではない」

「でも、どうやって見つけたのですか？」

「そうじゃのう。もうきみにもわかったじゃろうが、わしは長年、ヴォルデモートの過去をできるだけ詳らかにすることを責務としてきた。ヴォルデモートがかつて知っておった場所を訪ねて、わしはあちこちを旅した。たまたま廃屋になったゴーンの家に、指輪が隠してあったのを見つけたのじゃ。その中に魂の一部を首尾よく封じ込めたあとは、ヴォルデモートはもう指輪をはめたくなかったのじゃな。先祖がかつて住んでいた小屋に指輪を隠し、幾重にも強力な魔術を施して指輪を護った——もちろん、モーフィンはずでにアズカバンに連れ去られておった——いつの日か、わしがわざわざその廃屋を訪ねるだろうとは、またわしが魔法による秘匿の跡に目を光らせるだろうとは、夢にも思わなかったことじゃろう」

「しかし、心から祝うわけにはいかぬ。きみは日記を、わしは指輪を破壊したが、魂の七分断説が正しいとすれば、あと四個の分霊箱が残っておる」

「それはどんな形でもありうるのですね？」  
ハリーが言った。

「古い缶詰とか、えーと、空の薬瓶とか…  
…？」

「きみが考えているのは、ハリー、移動キーじゃ。それはあたりまえの物で、簡単に見落とされそうな物でなければならない。しかし、ヴォルデモート卿が、自分の大切な魂を護るのに、ブリキ缶や古い薬瓶を使うと思うかね？ わしがこれまできみに見せたことを忘れていようじゃ。ヴォルデモート卿は勝利のトロフィーを集めたがったし、強力な魔法の歴史を持った物を好んだ。自尊心、自分の優位性に対する信仰、魔法史に驚くべき一角を占めようとする決意。こうしたことから考えると、ヴォルデモートは分霊箱をある程度慎重に選び、名誉にふさわしい品々を好んで

attack — the piece that lives in his body.”

“But the six Horcruxes, then,” said Harry, a little desperately, “how are we supposed to find them?”

“You are forgetting ... you have already destroyed one of them. And I have destroyed another.”

“You have?” said Harry eagerly.

“Yes indeed,” said Dumbledore, and he raised his blackened, burned-looking hand. “The ring, Harry. Marvolo’s ring. And a terrible curse there was upon it too. Had it not been — forgive me the lack of seemly modesty — for my own prodigious skill, and for Professor Snape’s timely action when I returned to Hogwarts, desperately injured, I might not have lived to tell the tale. However, a withered hand does not seem an unreasonable exchange for a seventh of Voldemort’s soul. The ring is no longer a Horcrux.”

“But how did you find it?”

“Well, as you now know, for many years I have made it my business to discover as much as I can about Voldemort’s past life. I have traveled widely, visiting those places he once knew. I stumbled across the ring hidden in the ruin of the Gaunts’ house. It seems that once Voldemort had succeeded in sealing a piece of his soul inside it, he did not want to wear it anymore. He hid it, protected by many powerful enchantments, in the shack where his ancestors had once lived (Morfin having been carted off to Azkaban, of course), never guessing that I might one day take the trouble to visit the ruin, or that I might be keeping an eye open for traces of magical concealment.

“However, we should not congratulate ourselves too heartily. You destroyed the diary

選んだと思われる」

「日記はそれほど特別ではありませんでした」

「日記は、きみ自身が言うたように、ヴォルデモートがスリザリンの後継者であるという証となるものじゃった。ヴォルデモートはそのことを、この上なく大切だと考えたに違いない」

「それじゃ、ほかの分霊箱は？」ハリーが聞いた。

「先生、どういう品か、ご存知なのですか？」

「推量するしかない」ダンブルドアが言った。

「いまも言うたような理由から、ヴォルデモート卿は、品物自体が何らかの意味で偉大なものを好んだであろうと思う。そこでわしは、ヴォルデモートの過去を隈なく探り、あの者の周囲で何か品物が紛失した形跡を見つけようとした」

「ロケットだ！」ハリーが大声を出した。

「ハッフルパフのカップ！」

「そうじゃ」ダンブルドアが微笑んだ。

「賭けてもよいが——もう一方の手を賭けるわけにはいかぬのう——指の一、二本ぐらいなら賭けてもよいが、その二つの品が三番目と四番目の分霊箱になった。

残る二個は、全部で六個を創ったと仮定しての話じゃが、もっと難しい。

しかし、当たるも八卦で言うならば、ハッフルパフとスリザリンの品を確保したあと、ヴォルデモートは、グリフィンボールとレイブンクローの所持品を探しはじめたであろう。四人の創始者の四つの品々は、ヴォルデモートの頭の中で、強い引力になっていたに違いない。果たしてレイブンクローの品を何か見つけたかどうか、わしは答えを持たぬが、しかし、グリフィンボール縁の品として知られる唯一の物は、いまだに無事じゃ」ダンブルドアは黒焦げの指で背後の壁を指した。

そこには、ルビーをちりばめた剣が、ガラスケースに収まっていた。

「先生、ヴォルデモートは、本当はそれが目当てで、ホグワーツに戻ってきたかったのだ

and I the ring, but if we are right in our theory of a seven-part soul, four Horcruxes remain.”

“And they could be anything?” said Harry. “They could be old tin cans or, I dunno, empty potion bottles. ...”

“You are thinking of Portkeys, Harry, which must be ordinary objects, easy to overlook. But would Lord Voldemort use tin cans or old potion bottles to guard his own precious soul? You are forgetting what I have showed you. Lord Voldemort liked to collect trophies, and he preferred objects with a powerful magical history. His pride, his belief in his own superiority, his determination to carve for himself a startling place in magical history; these things suggest to me that Voldemort would have chosen his Horcruxes with some care, favoring objects worthy of the honor.”

“The diary wasn’t that special.”

“The diary, as you have said yourself, was proof that he was the Heir of Slytherin; I am sure that Voldemort considered it of stupendous importance.”

“So, the other Horcruxes?” said Harry. “Do you think you know what they are, sir?”

“I can only guess,” said Dumbledore. “For the reasons I have already given, I believe that Lord Voldemort would prefer objects that, in themselves, have a certain grandeur. I have therefore trawled back through Voldemort’s past to see if I can find evidence that such artifacts have disappeared around him.”

“The locket!” said Harry loudly. “Hufflepuff’s cup!”

“Yes,” said Dumbledore, smiling, “I would be prepared to bet — perhaps not my other hand — but a couple of fingers, that they became Horcruxes three and four. The remaining

しょうか？」ハリーが言った。

「創始者の一人の品を何か見つけようとして？」

「わしもまさにそう思う」ダンブルドアが言った。

「しかし、残念ながら、そこから先はあまり説明できぬ。なぜなら、ヴォルデモートは学校の中を探索する機会もなく——とわしは信じておるのじゃが——門前払いされてしまったのじゃから。ヴォルデモートは、四人の創始者の品々を集めるという野望を満たすことができなかった、と結論せざるをえんじやろう。間違いなく二つは手に入れた三つ見つけたかも知れぬ——いまはせいぜいそこまでしか考えられぬ」

「レイブンクローかグリフィンドールの品のどちらかを手に入れたとしても、まだ六番目のぶんれいばこ分霊箱が残っています」

ハリーは指を折って数えながら言った。

「それとも、二つの品を両方とも手に入れたのでしょうか？」

「そうは思わぬ」ダンブルドアが言った。

「六番目が何か、わしにはわかるような気がする。わしが、蛇のナギニの行動にしばらく興味を持っていたと打ち明けたら、きみはどう思うかね？」

「あの蛇ですか？」ハリーはギクッとした。

「動物を分霊箱に使えるのですか？」

「いや、賢明とは言えぬ」ダンブルドアが言った。

「それ自身が考えたり動いたりできるものに、魂の一部を預けるのは、当然危険を伴う。しかし、わしの計算が正しければ、ヴォルデモートがきみを殺そうとして、ご両親の家に侵入したとき、六個の分霊箱という目標には、まだ少なくとも一個欠けておった」

「ヴォルデモートは、特に重大な者の死の時まで、分霊箱を作る過程を延期していたようじゃ。きみの場合は、紛れもなくそうした死の一つじゃったろう。ヴォルデモートは、きみを殺せば、予言が示した危機を打ち砕くことになるかと信じていた。自分を無敵の存在にできると信じていた。きみを殺して最後の分霊箱を作ろうと考えていたと、わしは確信を持っている」

two, assuming again that he created a total of six, are more of a problem, but I will hazard a guess that, having secured objects from Hufflepuff and Slytherin, he set out to track down objects owned by Gryffindor or Ravenclaw. Four objects from the four founders would, I am sure, have exerted a powerful pull over Voldemort's imagination. I cannot answer for whether he ever managed to find anything of Ravenclaw's. I am confident, however, that the only known relic of Gryffindor remains safe."

Dumbledore pointed his blackened fingers to the wall behind him, where a ruby-encrusted sword reposed within a glass case.

"Do you think that's why he really wanted to come back to Hogwarts, sir?" said Harry. "To try and find something from one of the other founders?"

"My thoughts precisely," said Dumbledore. "But unfortunately, that does not advance us much further, for he was turned away, or so I believe, without the chance to search the school. I am forced to conclude that he never fulfilled his ambition of collecting four founders' objects. He definitely had two — he may have found three — that is the best we can do for now."

"Even if he got something of Ravenclaw's or of Gryffindor's, that leaves a sixth Horcrux," said Harry, counting on his fingers. "Unless he got both?"

"I don't think so," said Dumbledore. "I think I know what the sixth Horcrux is. I wonder what you will say when I confess that I have been curious for a while about the behavior of the snake, Nagini?"

"The snake?" said Harry, startled. "You can

「知ってのとおり、あの者はしくじった。しかし、何年かの後、ヴォルデモートはナギニを使って年老いたマグルの男を殺し、たぶんそのときに、ナギニを最後の分霊箱にすることを思いついたのじゃろう。ナギニはスリザリンとのつながりを際立たせるし、ヴォルデモート卿の神秘的な雰囲気をも高める。ヴォルデモートが好きになれる何かがあるとするならば、おそらくそれはナギニじゃないかと思う。たしかにナギニをそばに置きたがっているし、いくら蛇語使いじゃと言っても異常なほど、ナギニを強く操っているようじゃ」

「すると」ハリーが言った。

「日記もなくなったし、指輪もなくなった。カップ、ロケット、それと蛇はまだ残っている。そして先生は、かつてレイブンクローかグリフィンドールのものであった品か何かが、分霊箱になっているかもしれないとお考えなのですね？」

「見事に簡潔で正確な要約じゃ。そのとおり」ダンブルドアは一礼しながら言った。

「それで……先生はまだ、そうした物を探しているのですね？ 学校を留守になさったとき、そういう場所を訪ねていらっやったのですか？」

「そうじゃ」ダンブルドアが答えた。

「長いこと探しておった。たぶん……わしの考えでは……ほどなくもう一つ発見できるかもしれない。それらしい印がある」

「発見なさったら」ハリーが急いで言った。「僕も一緒に行って、それを破壊する手伝いできませんか？」

ダンブルドアは一瞬、ハリーをじっと見つめ、やがて口を開いた。

「いいじゃろう」

「いいんですか？」ハリーは、まさかの答えに衝撃を受けた。

「いかにも」ダンブルドアはわずかに微笑んでいた。

「きみはその権利を勝ち取ったと思う」

ハリーは胸が高鳴った。

初めて警告や庇護の言葉を聞かされなかったのがうれしかった。

周囲の歴代校長たちは、ダンブルドアの決断に、あまり感心しないようだった。

use animals as Horcruxes?”

“Well, it is inadvisable to do so,” said Dumbledore, “because to confide a part of your soul to something that can think and move for itself is obviously a very risky business. However, if my calculations are correct, Voldemort was still at least one Horcrux short of his goal of six when he entered your parents’ house with the intention of killing you.

“He seems to have reserved the process of making Horcruxes for particularly significant deaths. You would certainly have been that. He believed that in killing you, he was destroying the danger the prophecy had outlined. He believed he was making himself invincible. I am sure that he was intending to make his final Horcrux with your death.

“As we know, he failed. After an interval of some years, however, he used Nagini to kill an old Muggle man, and it might then have occurred to him to turn her into his last Horcrux. She underlines the Slytherin connection, which enhances Lord Voldemort’s mystique; I think he is perhaps as fond of her as he can be of anything; he certainly likes to keep her close, and he seems to have an unusual amount of control over her, even for a Parselmouth.”

“So,” said Harry, “the diary’s gone, the ring’s gone. The cup, the locket, and the snake are still intact, and you think there might be a Horcrux that was once Ravenclaw’s or Gryffindor’s?”

“An admirably succinct and accurate summary, yes,” said Dumbledore, bowing his head.

“So ... are you still looking for them, sir? Is



ハリーには何人かが首を横に振っているのが見えたし、フィニアス ナイジエラスはフンと鼻を鳴らした。

「先生、ヴォルデモートは、分霊箱が壊されたとき、それがわかるのですか？ 感じるのですか？」ハリーは肖像画の反応を無視して尋ねた。

「非常に興味ある質問じゃよ、ハリー。答えは否じゃろう。ヴォルデモートはいまや、どっぴりと悪に染まっておるし、さらに自分自身の肝心な部分である分霊が、ずいぶん長いこと本体から切り離されておるので、我々が感じるようには感じない。たぶん、自分が死ぬ時点で、あの者は失った物に気づくのであろう……たとえば、ルシウス マルフォイの口から真実を吐かせるまで、あの者は日記が破壊されてしまったことに気づかなんだ。日記がズタズタになり、そのすべての力を失ったと知ったとき、ヴォルデモートの怒りたるや、見るも恐ろしいほどじゃったと聞き及ぶ」

「でも、ルシウス マルフォイがホグワーツに日記を忍び込ませたのは、あいつがそう指示したからでしょう？」

「いかにも。何年も前のことじゃが、あの者が複数の分霊箱を作れるという確信があったときにじゃ。しかしながら、ヴォルデモートの命令を待つ手はずじゃったルシウスは、その命令を受けることはなかった。日記をルシウスに預けてから間もなく、ヴォルデモートが消えたからじゃ。あの者は、ルシウスが分霊箱をただ大切に護るじゃろうと思い、まさか、それ以外のことをするとは思わなかったに違いない。しかし、ヴォルデモートは、ルシウスの恐怖心を過大に考えておった。何年も姿を消したままの、死んだと思われるご主人様に対して、ルシウスが持つ恐怖心のことじゃ。もちろん、ルシウスは日記の本性を知らなんだ。あの日記には巧みな魔法がかけがあるので、『秘密の部屋』をもう一度開かせる物になるだろうと、ヴォルデモートがルシウスに話しておいたのじゃろうと思う。ご主人様の魂の一部が託されている物だと知っていたなら、ルシウスは間違いなくあの日記を、もっと恭しく扱ったことじゃろうーし

that where you've been going when you've been leaving the school?"

“Correct,” said Dumbledore. “I have been looking for a very long time. I think ... perhaps ... I may be close to finding another one. There are hopeful signs.”

“And if you do,” said Harry quickly, “can I come with you and help get rid of it?”

Dumbledore looked at Harry very intently for a moment before saying, “Yes, I think so.”

“I can?” said Harry, thoroughly taken aback.

“Oh yes,” said Dumbledore, smiling slightly. “I think you have earned that right.”

Harry felt his heart lift. It was very good not to hear words of caution and protection for once. The headmasters and headmistresses around the walls seemed less impressed by Dumbledore's decision; Harry saw a few of them shaking their heads and Phineas Nigellus actually snorted.

“Does Voldemort know when a Horcrux is destroyed, sir? Can he feel it?” Harry asked, ignoring the portraits.

“A very interesting question, Harry. I believe not. I believe that Voldemort is now so immersed in evil, and these crucial parts of himself have been detached for so long, he does not feel as we do. Perhaps, at the point of death, he might be aware of his loss ... but he was not aware, for instance, that the diary had been destroyed until he forced the truth out of Lucius Malfoy. When Voldemort discovered that the diary had been mutilated and robbed of all its powers, I am told that his anger was terrible to behold.”

“But I thought he meant Lucius Malfoy to

かし、そうはせずに、ルシウスは、昔の計画を自分自身の目的のために勝手に実行してしまった。アーサー ウィーズリーの娘のもとに日記を忍び込ませることで、アーサーの信用を傷つけ、わしをホグワーツから追放させ、同時に自分にとって非常に不利になる物証を片付けるという、一石三鳥を狙ったのじゃ。ああ、哀れなルシウスよ……一つには、自らの利益のために分霊箱を捨ててしまうたという事実、また一つには去年の魔法省での大失態で、ヴォルデモートの逆鱗に触れてしまうた。現在はアズカバンに収監されているから安全じゃと、本人が内心喜んでいるとしても無理からぬことじゃ」

ハリーはしばらく考え込み、やがて質問した。

「すると、分霊箱を全部破壊すれば、ヴォルデモートを殺すことが可能なのですか？」

「そうじゃろうと思う」ダンブルドアが言った。

「分霊箱がなければ、ヴォルデモートは切り刻まれて減損した魂を持つ、滅すべき運命の存在じゃ。しかし、忘れるでない。あの者の魂は、修復不能なまでに損傷されておるかもしれぬが、頭脳と魔力は無傷じゃ。ヴォルデモートのような魔法使いを殺すには、たとえ『分霊箱』がなくなっても、非凡な技と力を要するじゃろう」

「でも、僕は非凡な技も力も持っていません」ハリーは思わず口走った。

「いや、持っておる」ダンブルドアがきっぱりと言った。

「きみはヴォルデモートが持ったことがない力を持っておる。きみの力は——」

「わかっています！」ハリーはイライラしながら言った。

「僕は愛することができます！」

そのあとにもう一言「それがどうした！」と言いたいのを、ハリーはやっとの思いで呑み込んだ。

「そうじゃよ、ハリー、きみは愛することができる」

ダンブルドアは、ハリーがいま呑み込んだ言葉をはっきりと知っているかのような表情で言った。

smuggle it into Hogwarts?”

“Yes, he did, years ago, when he was sure he would be able to create more Horcruxes, but still Lucius was supposed to wait for Voldemort’s say-so, and he never received it, for Voldemort vanished shortly after giving him the diary.

“No doubt he thought that Lucius would not dare do anything with the Horcrux other than guard it carefully, but he was counting too much upon Lucius’s fear of a master who had been gone for years and whom Lucius believed dead. Of course, Lucius did not know what the diary really was. I understand that Voldemort had told him the diary would cause the Chamber of Secrets to reopen because it was cleverly enchanted. Had Lucius known he held a portion of his master’s soul in his hands, he would undoubtedly have treated it with more reverence — but instead he went ahead and carried out the old plan for his own ends: By planting the diary upon Arthur Weasley’s daughter, he hoped to discredit Arthur and get rid of a highly incriminating magical object in one stroke. Ah, poor Lucius ... what with Voldemort’s fury about the fact that he threw away the Horcrux for his own gain, and the fiasco at the Ministry last year, I would not be surprised if he is not secretly glad to be safe in Azkaban at the moment.”

Harry sat in thought for a moment, then asked, “So if all of his Horcruxes are destroyed, Voldemort *could* be killed?”

“Yes, I think so,” said Dumbledore. “Without his Horcruxes, Voldemort will be a mortal man with a maimed and diminished soul. Never forget, though, that while his soul may be damaged beyond repair, his brain and

「これまできみの身に起こったさまざまな出来事を考えてみれば、それは偉大なすばらしいものなのじゃ。ハリー、自分がどんなに非凡な人間であるかを理解するには、きみはまだ若すぎる」

「それじゃ、予言で、僕が『闇の帝王の知らぬ力』を持つと言っていたのは、ただ単なる——愛？」ハリーは少し失望した。

「そうじゃ——単なる愛じゃ」ダンブルドアが言った。

「しかし、ハリー、忘れるでないぞ。予言が予言として意味を持つのは、ヴォルデモートがそのようにしたからなのじゃということ。先学年の終わりにきみに話したが、ヴォルデモートは、自分にとっていちばん危険になりうる人物として、きみを選んだ——そうすることで、あの者はきみを、自分にとってもっとも危険な人物にしたのじゃ」

「でも、結局はおんなじことになる——」

「いや、同じにはならぬ！」

こんどはダンブルドアがイライラした口調になった。

黒く萎びた手でハリーを指しながら、ダンブルドアが言った。

「きみは予言に重きを置きすぎておる」

「でも」ハリーは急ぎ込んだ。

「でも先生は、予言の意味を——」

「ヴォルデモートがまったく予言を開かなかったとしたら、予言は実現したじゃろうか？ 予言に意味があったじゃろうか？ もちろん、ない！『予言の間』のすべての予言が現実のものとなったと思うかね？」

「でも」ハリーは当惑した。

「でも先生は先学年におっしゃいました。二人のうちどちらかが、もう一人を殺さなければならぬと——」

「ハリー、ハリー、それはヴォルデモートが重大な間違いを犯し、トレローニー先生の言葉に応じて行動したからじゃ！ヴォルデモートがきみの父君を殺さなかったら、きみの心に燃えるような復讐の願いを掻き立てたじゃろうか？もちろん否じゃ！ヴォルデモートしが、きみを守ろうとした母君を死に追いやらなかったら、あの者が侵入できぬほどの強い魔法の護りを、きみに与えることになったじ

his magical powers remain intact. It will take uncommon skill and power to kill a wizard like Voldemort even without his Horcruxes.”

“But I haven’t got uncommon skill and power,” said Harry, before he could stop himself.

“Yes, you have,” said Dumbledore firmly. “You have a power that Voldemort has never had. You can —”

“I know!” said Harry impatiently. “I can love!” It was only with difficulty that he stopped himself adding, “Big deal!”

“Yes, Harry, you can love,” said Dumbledore, who looked as though he knew perfectly well what Harry had just refrained from saying. “Which, given everything that has happened to you, is a great and remarkable thing. You are still too young to understand how unusual you are, Harry.”

“So, when the prophecy says that I’ll have ‘power the Dark Lord knows not,’ it just means — love?” asked Harry, feeling a little let down.

“Yes — just love,” said Dumbledore. “But Harry, never forget that what the prophecy says is only significant because Voldemort made it so. I told you this at the end of last year. Voldemort singled you out as the person who would be most dangerous to him — and in doing so, he *made* you the person who would be most dangerous to him!”

“But it comes to the same —”

“No, it doesn’t!” said Dumbledore, sounding impatient now. Pointing at Harry with his black, withered hand, he said, “You are setting too much store by the prophecy!”

“But,” spluttered Harry, “but you said the prophecy means —”

やろうか？ もちろん否じゃよ、ハリー！ わからぬか？ すべての暴君たる者がそうであるように、ヴォルデモート自身が、最大の敵を創り出したのじゃ！ 暴君たる者が、自ら虐げている民をどんなに恐れているか、わかるかね？ 暴君は、多くの虐げられた者の中から、ある日必ず誰かが立ち上がり、反撃することを認識しておるのじゃ。ヴォルデモートとて例外ではない！ 誰かが自分に歯向かうのを、常に警戒しておる。予言を聞いたヴォルデモートは、すぐさま行動した。その結果、自分を破滅させる可能性のもっとも高い人物を自ら選んだばかりでなく、その者に無類の破壊的な武器まで手渡したのじゃ」

「でも——」

「きみがこのことを理解するのが肝心ののじゃ！」

ダンブルドアは立ち上がって、輝くロープを翻しながら、部屋の中を大股で歩き回っていた。

こんなに激しく論じるダンブルドアを、ハリーは初めて見た。

「きみを殺そうとしたことで、ヴォルデモート自身が、非凡なる人物を選び出した。その人物はわしの目の前におる。そしてその人物に、任務のための道具まで与えた！ きみがヴォルデモートの考えや野心を覗き見ることができ、あの者が命令する際に使う、蛇の言葉を理解することさえできるようにしたのは、ヴォルデモートの失敗じゃった。しかも、ハリー、ヴォルデモートの世界を洞察できるといふ、きみの特権にもかかわらず——ついにながら、そのような才能を得るためなら、死喰い人は殺人も厭わぬことじゃろう——きみは一度たりとも闇の魔術に誘惑されたことがない。決して、一瞬たりとも、ヴォルデモートの従者になりたいという願望を、露ほども見せたことがない！」

「当然です！」 ハリーは憤った。

「あいつは僕の父さんと母さんを殺した！」

「つまり、きみは、愛する力によって護られておるのじゃ！」 まダンブルドアが声を取り上げた。

「ヴォルデモートが持つ類の力の誘惑に抗する唯一の護りじゃ！ あらゆる誘惑に耐えなけ

“If Voldemort had never heard of the prophecy, would it have been fulfilled? Would it have meant anything? Of course not! Do you think every prophecy in the Hall of Prophecy has been fulfilled?”

“But,” said Harry, bewildered, “but last year, you said one of us would have to kill the other —”

“Harry, Harry, only because Voldemort made a grave error, and acted on Professor Trelawney’s words! If Voldemort had never murdered your father, would he have imparted in you a furious desire for revenge? Of course not! If he had not forced your mother to die for you, would he have given you a magical protection he could not penetrate? Of course not, Harry! Don’t you see? Voldemort himself created his worst enemy, just as tyrants everywhere do! Have you any idea how much tyrants fear the people they oppress? All of them realize that, one day, amongst their many victims, there is sure to be one who rises against them and strikes back! Voldemort is no different! Always he was on the lookout for the one who would challenge him. He heard the prophecy and he leapt into action, with the result that he not only handpicked the man most likely to finish him, he handed him uniquely deadly weapons!”

“But —”

“It is essential that you understand this!” said Dumbledore, standing up and striding about the room, his glittering robes swooshing in his wake; Harry had never seen him so agitated. “By attempting to kill you, Voldemort himself singled out the remarkable person who sits here in front of me, and gave him the tools for the job! It is Voldemort’s fault that you

ればならなかったにもかかわらず、あらゆる苦しみにもかかわらず、きみの心は純粋なまじゃ。十一歳のとき、きみの心の望みを映す鏡を見つめていたときと変わらぬ純粋さじゃ。あの鏡が示しておったのは、不滅の命でも富でもなく、ヴォルデモート卿を倒す方法のみじゃ。ハリー、あの鏡に、きみが見たと同じものを見る魔法使いがいかに少ないか、わかっておるか？ヴォルデモートはあのときに、自分が対峙しているものが何なのかを知るべきじゃった。しかし、あの者は気づかなかった！」

「しかし、あの者は、いまではそれを知っておる。きみは自らを損なうことなしに、ヴォルデモート卿の心に舞い込むことができた。一方、あの者は、きみに取り憑こうとすれば、死ぬほどの苦しみに耐えなければならないということに、魔法省で気づいたのじゃ。なぜそうなるのか、ハリー、あの者にはわかっておらぬと思う。あの者は、自らの魂を分断することを急ぐあまり、汚れのない、全き魂の比類なき力を理解する間がなかったのじゃ」

「でも、先生」

ハリーは反論がましく聞こえないよう、健気に努力しながら言った。

「結局は、すべて同じことなのではないですか？僕はあいつを殺さなければならない。さもないとー」

「なければならぬ？」ダンブルドアが言った。

「もちろん、きみはそうしなければならない！しかし、予言のせいではない！きみが、きみ自身が、そうしなければ休まることがないからじゃ！わしも、きみもそれを知っておる！頼む、しばしの間でよいから、あの予言を聞かなかったと思ってほしい！さあ、ヴォルデモートについて、きみはどう感じるかな？考えるのじゃ！」

ハリーは、目の前を大股で往ったり来たりしているダンブルドアを見つめながら、考えた。

母親のこと、父親のこと、そしてシリウスのことを思った。

were able to see into his thoughts, his ambitions, that you even understand the snakelike language in which he gives orders, and yet, Harry, despite your privileged insight into Voldemort's world (which, incidentally, is a gift any Death Eater would kill to have), you have never been seduced by the Dark Arts, never, even for a second, shown the slightest desire to become one of Voldemort's followers!"

"Of course I haven't!" said Harry indignantly. "He killed my mum and dad!"

"You are protected, in short, by your ability to love!" said Dumbledore loudly. "The only protection that can possibly work against the lure of power like Voldemort's! In spite of all the temptation you have endured, all the suffering, you remain pure of heart, just as pure as you were at the age of eleven, when you stared into a mirror that reflected your heart's desire, and it showed you only the way to thwart Lord Voldemort, and not immortality or riches. Harry, have you any idea how few wizards could have seen what you saw in that mirror? Voldemort should have known then what he was dealing with, but he did not!"

"But he knows it now. You have flitted into Lord Voldemort's mind without damage to yourself, but he cannot possess you without enduring mortal agony, as he discovered in the Ministry. I do not think he understands why, Harry, but then, he was in such a hurry to mutilate his own soul, he never paused to understand the incomparable power of a soul that is untarnished and whole."

"But, sir," said Harry, making valiant efforts not to sound argumentative, "it all comes to the same thing, doesn't it? I've got to try and kill

セドリック ディゴリーのことを思った。

ヴォルデモート卿の仕業であることがわかっていて、あらゆる恐ろしい行為のことを思った。

胸の中にメラメラと炎が燃え上がり、喉元を焦がすような気がした。

「あいつを破滅させたい」ハリーは静かに言った。

「そして、僕が、そうしてやりたい

「もちろんきみがそうしたいのじゃ！」ダンブルドアが叫んだ。

「よいか。予言はきみが何かをしなければならぬという意味ではない！しかし、予言は、ヴォルデモート卿に、きみを『自分に比肩する者として印す』ように仕向けた。つまり、きみがどういう道を選ぼうと自由じゃ。予言に背を向けるのも自由なのじゃ！しかしヴォルデモートは、いまでも予言を重要視しておる。きみを追いつけるじゃろう……さすれば、確実に、まさに……」

「一方が、他方の手にかかって死ぬ」ハリーが言った。

「そうです」

ハリーはやっと、ダンブルドアが自分に言わんとしていたことがわかった。

死に直面する戦いの場に引きずり込まれるか、頭を高く上げてその場に歩み入るかの違いなのだ、とハリーは思った。

その二つの道の間には、選択の余地はほとんどないという人も、たぶんいるだろう。

しかし、ダンブルドアは知っている——僕も知っている。

そう思うと、誇らしさが一気に込み上げてきた。

そして、僕の両親も知っていた——その二つの間は、天と地ほどに違うのだということ

を。

him, or —”

“Got to?” said Dumbledore. “Of course you’ve got to! But not because of the prophecy! Because you, yourself, will never rest until you’ve tried! We both know it! Imagine, please, just for a moment, that you had never heard that prophecy! How would you feel about Voldemort now? Think!”

Harry watched Dumbledore striding up and down in front of him, and thought. He thought of his mother, his father, and Sirius. He thought of Cedric Diggory. He thought of all the terrible deeds he knew Lord Voldemort had done. A flame seemed to leap inside his chest, searing his throat.

“I’d want him finished,” said Harry quietly. “And I’d want to do it.”

“Of course you would!” cried Dumbledore. “You see, the prophecy does not mean you *have* to do anything! But the prophecy caused Lord Voldemort to *mark you as his equal*. ... In other words, you are free to choose your way, quite free to turn your back on the prophecy! But Voldemort continues to set store by the prophecy. He will continue to hunt you ... which makes it certain, really, that —”

“That one of us is going to end up killing the other,” said Harry. “Yes.”

But he understood at last what Dumbledore had been trying to tell him. It was, he thought, the difference between being dragged into the arena to face a battle to the death and walking into the arena with your head held high. Some people, perhaps, would say that there was little to choose between the two ways, but Dumbledore knew — *and so do I*, thought Harry, with a rush of fierce pride, *and so did my parents* — that there was all the difference in the world.

